

『実証の考古学—松藤和人先生退職記念論文集—』

(同志社大学考古学シリーズ XII) 別刷

二〇一八年八月三十一日発行

## 縄文石器の系統と原材料

上  
峯  
篤  
史

# 縄文石器の系統と原材

上 峯 篤 史

## 一 本稿の視点

近年、縄文石器の型式学的な研究がひそかな注目を集めている。縄文時代研究の中心領域となつてゐる土器や集落、墓制の研究の影に隠れて、長らく等閑視されていた石器についても、二〇〇〇年代に入つてからは集成作業、製作技術や機能の研究など、基礎研究の充実がはかられるようになつてきた。そのなかで、縄文土器の型式学的研究の概念を石器研究に落とし込み、縄文石器の型式学的研究の可能性を明示した大工原豊（二〇〇八）や田中英司（二〇一二）の試み、層位的出土資料や共伴土器を参照しつつも、石器の型式学的操作によつて石器群の編年構築を目指す田部剛士（二〇一一、二〇一二）の挑戦によつて、縄文石器研究の新たな地平が拓かれたようと思われる。石器に関する情報の蓄積を受けて高まつた、これまで土器編年研究をもとに語られてきた縄文文化の時間的・空間的变化を別の視点から補完・検証しようとする氣概が、型式学的アプローチへの傾倒を後押ししていよう。

一方、型式学的研究を単なる年代尺度の整備にとどまらず、縄文時代の情報流動や人間集団の社会的関係の理解へとつなげるには、型式間の祖先—子孫関係についての説明が求められる。同種でありつつも外

見が異なる遺物の関係をどのように解釈するか。その背後に道具の製作や移動があることに目を向ければ、例えば水沢教子（二〇一四）による、原材料の理化学的分析と遺物の製作技術や型式学的特徴の観察を組み合わせる研究フレームは、最適解の一つだろう。原材料の分析は系統関係を想定するにあたっての必要条件を提示しうるし、その背景を見通すうえでも決定的な役割を果たしうる。理化学的手法による原材料の原産地推定は石器研究では確立された分野であり、この方面的研究を推進するための基盤が整っている。本稿では、石材原産地推定によつて集団の接触が証明できる範囲を定めたうえで、その範囲内における石器の型式学的類似点に注目し、系統論的な説明を試みる。研究蓄積が厚く、かつ特徴的な石器が見られる縄文前・中期石器群を対象とし、筆者がフィールドとしてきた近畿地方を検討の中心にする。時間尺度は土器編年としたがい、特に泉拓良・千葉豊（二〇〇三）の編年観をもとに地域間の年代的併行関係を理解する。また便宜的に、羽島下層II式→北白川下層II<sup>a</sup>式併行期を前期前葉、北白川下層II<sup>b</sup>・<sup>c</sup>式期を前期中葉、北白川下層III式→大歳山式併行期を前期後葉、鷹島式→船元II式併行期を中期前葉と表記する。

## 二 前・中期に用いられた石器石材

近畿地方の石器生産を支えた二上山北麓産サヌカイトは、早期後半までに分布域を近畿地方のほぼ全域にまで広げ、前期以降にはどの遺跡でも石器石材のほぼ一〇〇パーセントを占めるようになる（田部二〇〇七）。筆者の肉眼観察によれば、京都府浦入遺跡（舞鶴市教育委員会二〇〇二）や志高遺跡（肥後編一九八九）のサヌカイト製石器の多くは金山産サヌカイトを素材としていると推定されるが、これは日本海

沿岸地域に特有の状況である。京都府南栗ヶ塚遺跡や三重県源鳥C遺跡（竹内一九九三）の前期石器群には、管見の限り、金山産サヌカイトはふくまれない。近畿地方中央部においては、田部の指摘したとおり金山産サヌカイトがほとんど流入しなかつたと見てよい。

一方、前・中期石器群には黒曜岩製遺物が散見される。近畿地方には石器石材としての使用に耐えうる黒曜岩の原産地はないため、他地域からもたらされたのは明白である。図1には、蛍光エックス線分析による原産地推定が実施された資料のうち代表的な遺物を示した。1～5は早期末～前期末までの幅をもたせて年代づけるしかないが、6は前期中葉に、7～8は前期後葉に限定できる。1～5は隱岐系、6は西霧ヶ峰系に判別された（上峯ほか一〇一三）。さらに興味深いことに7～8が赤石山系に判別され、北海道白滝産の黒曜岩と推定された。7は河床礫を素材とし、縦長傾向の強い剥片を剥離する中で得られた一枚である。末端部が肥厚する様子からは剝離時に無理な力がかかつたことがうかがえ、打面側の折損も一連のものと考えられる。縁辺に二次加工が施されているが、加工意図は不明である。8も河床礫が素材になつており、面構成からは石核に分類される。白滝産の黒曜岩の分布は青森県三内丸山遺跡にもおよんでいるから（斎藤一〇〇五）、本事例は北海道～東北地方のどこかの遺跡から、志高遺跡に搬入されたものと解釈される。ほかにも滋賀県弁天島遺跡で隠岐系（早期後葉～中期前葉）、三重県長尾遺跡で西霧ヶ峰系、恩馳島系（ともに前期初頭～中葉）、兵庫県曾我井・野入遺跡で隠岐系（前期中葉）、三重県アカリ遺跡、縁通庵遺跡で西霧ヶ峰系（前期後葉）、滋賀県筑摩佃遺跡で霧ヶ峰産、神津島産（ともに中期前葉）に判別された事例がある（中井一九九七、宮原編二〇〇六、三重県石器石材研究会二〇一〇）。

このように、当該期の石器には四国地方、山陰地方、中部地方、東海地方東部、そして北海道～東北地

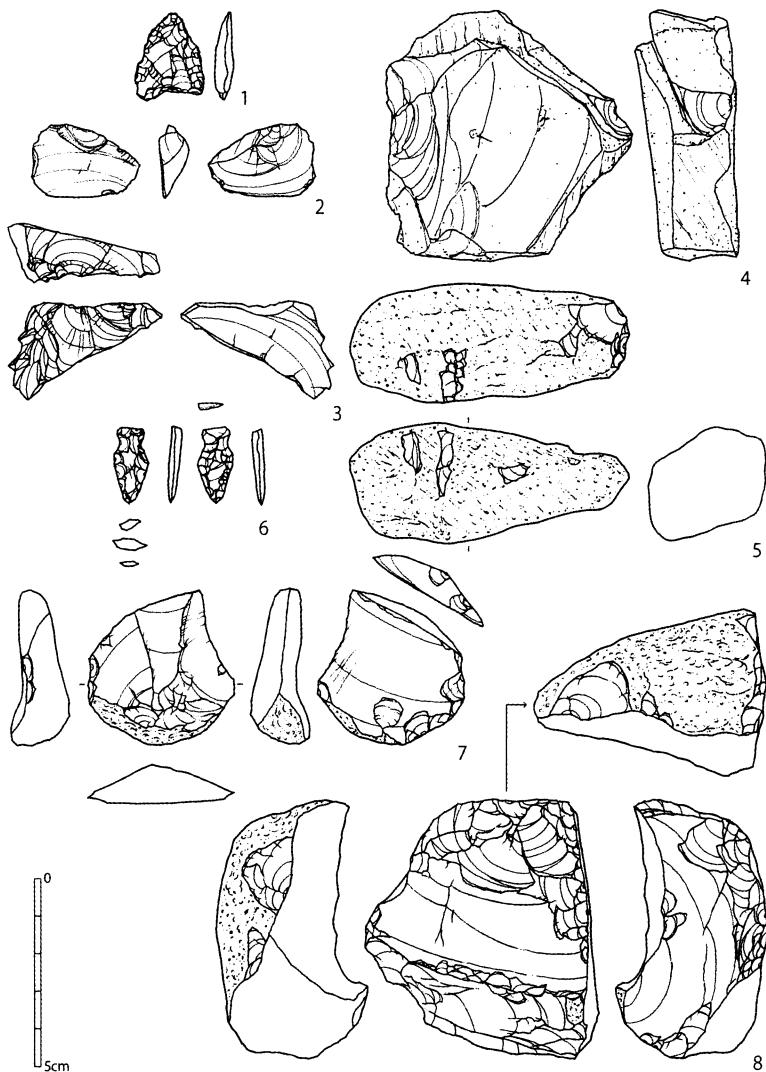


図1 原産地推定が実施された黒曜岩製遺物  
1~5 浦入遺跡（京都府舞鶴市）、7~8 志高遺跡（京都府舞鶴市）

方からもたらされた岩石を素材とするものがある。数量比からすれば、これらが近畿地方の石器群において占めた石器石材としての位置はきわめて小さいと考えられるが、近畿地方と他地域の集団の接触を示す証拠である。そして石器石材が移動したこの範囲こそが、石器群の系統関係を想定してよい範囲となる。

### 三 前・中期石器群の変遷

前期における石器群変遷の大枠は、福井県鳥浜貝塚の層位的出土例から見通すことができる。大下明（一〇〇三）が指摘するように、脚端部が尖り、側縁と基部下端が膨らむ形態の石鎌、正三角形の横型石匙が、鳥浜ZIV・ZV期（前期中葉）に明瞭な盛行期を見せる。一方、前後する時期には特徴的な石鎌形態は見いだせないとされ、石匙も不整形なものが目立つとする。石匙については、鈴木康二（一九九七）も同様の変遷觀を示している。これら先学の認識に、以降に調査・公表された滋賀県安土遺跡（泉編 二〇〇五）、三重県山添遺跡（小濱編 一〇〇七）などを加えると、図2の編年案を提示できる。

大下が注視した形態の石鎌（6～14）は、前期中葉では凹基鎌中の約四八パーセント、前期後葉では約一二パーセントを占める。同じ特徴をもつ石鎌は、栗津湖底遺跡や大阪府讚良川遺跡（瀬川編 一九九八）でも散見されるが、その割合は凹基鎌中で五パーセント以下である。これと並んで、両面加工によつて棒状～滴水形に仕上げられた石錐が顯著に組成される（17～18、35～36）。この形態の石錐は、中期に入つても変わらず石器群の一翼を担う（46）。

石匙については変化が明瞭で、件の正三角形のものは前期前葉に現れたのち、前期中葉においては石匙のほとんどをこの形態が占めるようになる（25～26）。前期後葉においては、若狭湾沿岸から程近い志高遺

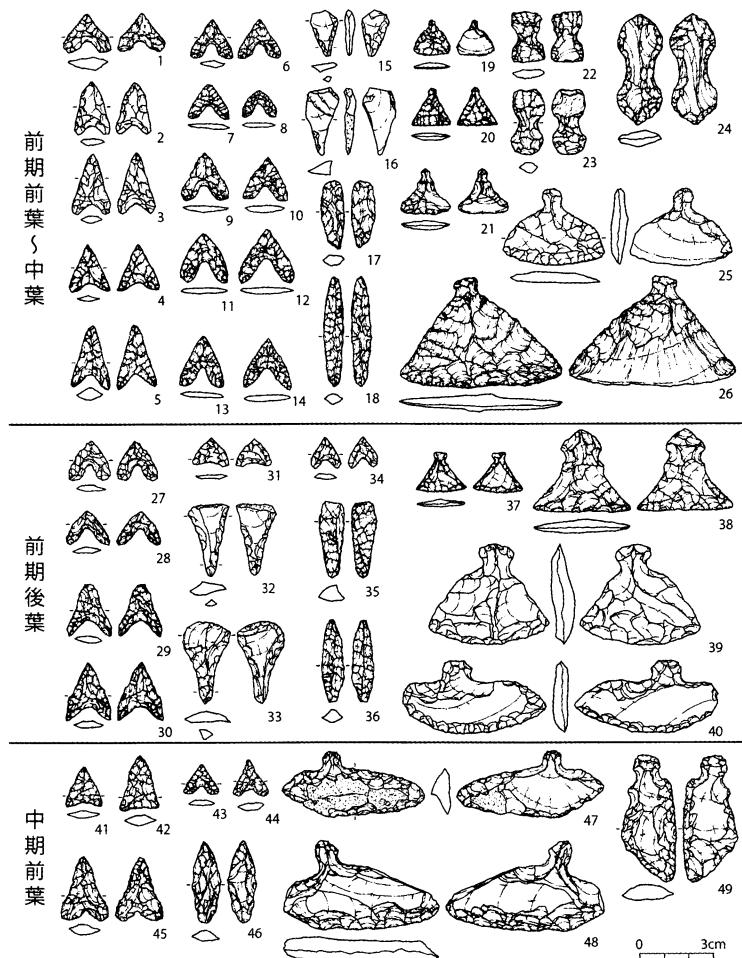


図2 近畿地方における縄文時代前・中期石器群

1~6、15~18、23、25 安土遺跡 (滋賀県蒲生郡安土町)、7~14、19~22、  
24、26 鳥浜貝塚 (福井県若狭町)、27、31~35、37~38、40 山添遺跡 (三  
重県松阪市)、28~29、36 縁通庵遺跡 (三重県多気郡多気町)、30、39 ア  
カリ遺跡 (三重県多気郡多気町)、41~44、47、49 粟津湖底遺跡第3貝塚  
(滋賀県大津市)、45~46、48 讃良川遺跡 (大阪府寝屋川市)

跡では正三角形の石匙が大勢を占める状況が続くのに対して、伊勢湾周辺の遺跡では、基部（つまみ部）がつまみ状に肥大したもの（38）や身部の成形が粗雑なもの（39）、平面形が凸字形で、つまみ部が身部の中央にない石匙（40）が見られる。正三角形の石匙の分布は狭くとも中国地方～関東地方にまでおよぶが、特に近畿地方北部～北陸地方にかけての日本海沿岸地域に濃集する。この地域から離れた地域では、正三角形石匙の消滅が早いと見なされる。中期には縦型石匙が目立つが、前期後葉以来の凸字形石匙も残存しており、両者の数量は拮抗する（47～49）。

すなわち近畿地方の縄文前期石器群は、脚端部が尖り、側縁と基部下端が膨らむ形態の石鎌、正三角形の横型石匙、棒状錐を特徴的に組成する石器群によつて特徴づけられる。それらの器種の形態的齊一性が薄れ、石器群の構成が解体されていくなかで縦型石匙など新たな要素が加わって、中期の石器群へと変遷していく、と理解できる（上峯二〇一八）。当該期の石器群の成り立ちを考えるには、最も顕著な変化を見せる石匙の系統関係を読み解くことが突破口になると予想される。

#### 四 石匙の系統関係

石器石材原産地研究の成果をもとに、当該期の近畿地方に暮らした人間集団の交流範囲が近畿地方やその隣接地域にとどまらず、東海地方東部や北海道～東北地方にまで達するとみれば、当該期の石器の系統関係もこれら遠方地域との関係から説明できる可能性がある。

東北地方～関東地方の縄文時代前期には、「有撮石器」や「押出型ポイント」と通称される特徴的な石器が散見される。量・質ともに最も充実した資料を有する山形県押出遺跡においては、「基部に両側から

抉りを入れて石匙のつまみと同様な作り方をした部分を持ち、両面あるいは両面加工の尖頭器状の器体を持つもの」と定義されている（長橋ほか編 一九九〇、二〇四頁）。鹿又喜隆（二〇〇九）による使用痕観察からは、イネ科植物の切斷作業に特化した道具と推定されている。一方この種の石器の製作面においては、平面形態が左右対称になるように相当の配慮がなされている点とともに、厚く大きな基部を有することも重要である（大工原 二〇〇八、一五七頁）。これには石匙と同様の製作意図を認めうるため、技術形態学的には「石匙」と呼んで差し支えない。ここでは大工原（二〇〇八）にならって「押出型石匙」と表記する。

図3は、大工原の集成にしたがつて、東北地方～関東地方の「押出型石匙」を時期ごとに配列したものである。ここで注目したいのは基部の変化である。前期中葉から、入念な加工によって基部を整え、つぼみ状に仕上げるものが明確化し始める。前期前葉にくらべて基部の肥大化傾向は明らかで、前期後葉においても基部が肥大した資料が目立つている。図4は、大工原が整理した中部～関東地方の石匙の出土事例に近畿地方の資料を加え、時期ごとに並べたものである。近畿地方では正三角形石匙が高い斉一性を見せる前期中葉から一転して、前期後葉には様々な形態の石匙が現れているが、その実態は正三角形石匙の基部形状の肥大化と、それぞれの地域の中では系譜が追えない縦型石匙の出現にあることが確認できる。中部地方にもその片鱗は見いだせるが、近畿地方ほど顕著な変化は指摘できない。

里木貝塚（間壁ほか 一九七二）の層位的出土例による限り、瀬戸内海沿岸地域では縦型石匙は中期中葉に出現し、近畿地方よりも後出する。また同地域では前期中葉以前の石匙に基部の肥大化傾向を認めがたいばかりか、西打遺跡（木下編 二〇〇〇）など前期後葉の石器群においても、石匙の基部に対する加工頻度は高くない。この様相に照らせば、石匙基部の肥大化傾向と縦型石匙の由来は、それらが先行して認め

縄文石器の系統と原材

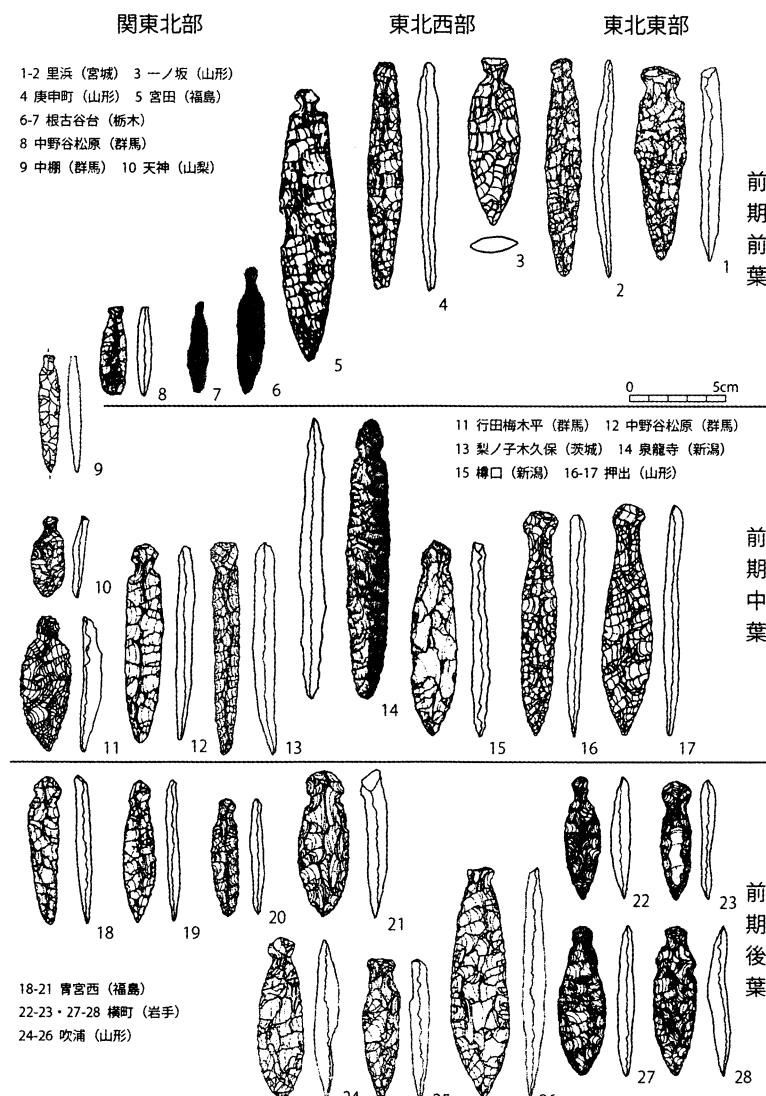


図3 東北～関東地方における「押出型石匙」の変遷



図4 近畿～関東地方における石匙の変遷

られる東方地域に求めるのが妥当である。これらの情報の発信源とみられる東北～北関東地方からの影響は、隣接する中部地方よりも近畿地方に強く表れており、中部地方を介した情報伝達よりも、東北～北関東地方から一足飛びに近畿地方に情報がもたらされたと考えた方が、現状を理解しやすい。その必要条件を担保する北海道産黒曜岩とともに、「押出型石匙」やその模倣品を彷彿とさせる縦型石匙（図4の23）と、その未完成品とみられる資料（同21）が志高遺跡にあることは、以上の想定の傍証となろう。

東北～関東地方と近畿地方では相當に外見の異なる石器が作られながらも、細部において上述したような類似点を見せる。石器製作者の集団間移動や集団の日常的な接触を考えるよりも、低頻度の集団接触を背景とした情報流動と模倣行為をイメージする方が遺物の実態に即している。異地性物質が一〇〇kmを超えるほど遠距離からもたらされる事例が、本州では縄文時代早期末から明確化し（前山一二〇一四）、前期にいたってさらに拡大する。前期に見られる物質移動は、経済的なメリットを期待した交換にとどまらず、儀礼的と解釈できる交換にまでおよび、集落間の日常的な連携をいつそう強固にしたという（小杉二〇〇三）。近年ようやく霧が晴れ始めた縄文石器にも、日本列島をかけめぐつた人間と情報の姿が確実に刻まれているのである。

#### 引用文献

- 泉 拓良・千葉 豊 一二〇〇二「縄文土器編年表」「日本考古学事典」、四一八～四一九頁。  
泉 拓良編 一二〇〇五「滋賀県安土遺跡資料」奈良文化財研究所。  
伊庭 功・瀬戸眞司編 一九九七『栗津湖底遺跡第3貝塚（栗津湖底遺跡Ⅰ）』滋賀県教育委員会・財團法人滋賀県文化財保護協会。

上峯篤史・松崎健太・金成太郎・杉原重夫 二〇一三「京都府舞鶴市志高遺跡・浦入遺跡出土黒曜岩岩製遺物の原産地推定」『日本文化財科学会第三〇回大会研究発表要旨集』、三〇一～三〇三頁。

大下 明 二〇〇三「関西における縄文時代前・中期石器群の概要と組成の検討」『縄文時代の石器Ⅱ』、一一三九頁。

関西縄文文化研究会編 二〇〇三「縄文時代の石器Ⅱ」関西縄文文化研究会。

小濱 学編 二〇〇七「山添遺跡（第4次発掘調査報告）」三重県埋蔵文化財センター。

鹿又喜隆 二〇〇九「押出遺跡の石器の機能」『日本考古学協会二〇〇九年度山形大会研究発表資料集』、二六三～二七二頁。

木下晴一編 二〇〇〇「西打遺跡Ⅰ」香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財センター。

小杉 康 二〇〇三「縄文のマツリと暮らし」岩波書店。

斎藤 岳 二〇〇五「三内丸山遺跡の黒曜石について」『特別史跡三内丸山遺跡年報』8、五三～五九頁。

鈴木康二 一九九七「縄文時代石器研究の方法論序説」『滋賀県文化財保護協会 紀要』、一～九頁。

瀬川芳則編 一九九八「寝屋川市史」第一巻 寝屋川市。

大工原 豊 二〇〇八「縄文石器研究序論」六一書房。

竹内英昭 一九九三「No.138 地点（源鳥C遺跡）の調査」『上野新都市開発整備区域埋蔵文化財発掘調査報告書』第1分冊、九～三九頁。

鳥浜貝塚研究グループ編 一九七九「鳥浜貝塚」1 鳥浜貝塚研究グループ。

田中英司 二〇一二「石器文様論」『考古学論攷』I、一七九～二〇四頁。

田部剛士 二〇〇七「サヌカイトの供給（上山）」「ものづくり 道具製作の技術と組織」縄文時代の考古学6、一七八～一八七頁。

田部剛士 二〇一「押型文前半期における石器の様相」「押型文土器期の諸相」、二〇～四二頁。

田部剛士 二〇一三「東海・近畿地方における石器群の変遷」「環境変化と人類活動」、四七～六八頁。

中井 均 一九九七「海を渡った黒曜石」『佐加太』六、三頁。

長橋 至・佐藤庄一編 一九九〇『押出遺跡発掘調査報告書（本文編）』建設省東北建設局山形工事事務所・山形県教育委員会。

前山精明 二〇一四「石器の材料・製作・使用」【縄文時代 下】講座日本の考古学4、一五七～一七八頁。

間壁忠彦・間壁霞子 一九七一『里木貝塚』倉敷考古館。

松葉和也編 一九九九『縁通庵遺跡・アカリ遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター。

三重石器石材研究会 二〇一〇「三重県出土の黒曜石とその原産地推定」『立命館大学考古学論集』V、一～二二一頁。

水沢教子 二〇一四『縄文社会における土器の移動と交流』雄山閣。

宮原文隆編 二〇〇六『曾我井・野入遺跡II』兵庫県多可郡多可町教育委員会。

舞鶴市教育委員会 二〇〇二『浦入遺跡群発掘調査報告書 遺物図版編』舞鶴市教育委員会。

肥後弘幸編 一九八九『志高遺跡』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター。

#### 挿図の出典

図1は（舞鶴市教育委員会二〇〇二）から引用、ならびに筆者実測・トレース。図2は報告書（鳥浜貝塚研究グループ編一九七九、伊庭ほか編一九九七、瀬川編一九九八、松葉編一九九九、泉編二〇〇五、小濱編二〇〇七）掲載図を再トレース。図3は（大工原二〇〇八）をもとに作成、図4は（大工原二〇〇八）ならびに（関西縄文文化研究会編二〇〇三）をもとに作成。